現代中国の書家二十人を紹介する連載

中国当代書家二十人

第13回

監修／中国書法家協会主席 蘇士澍
取材・文／郭同慶

林岫

林岫

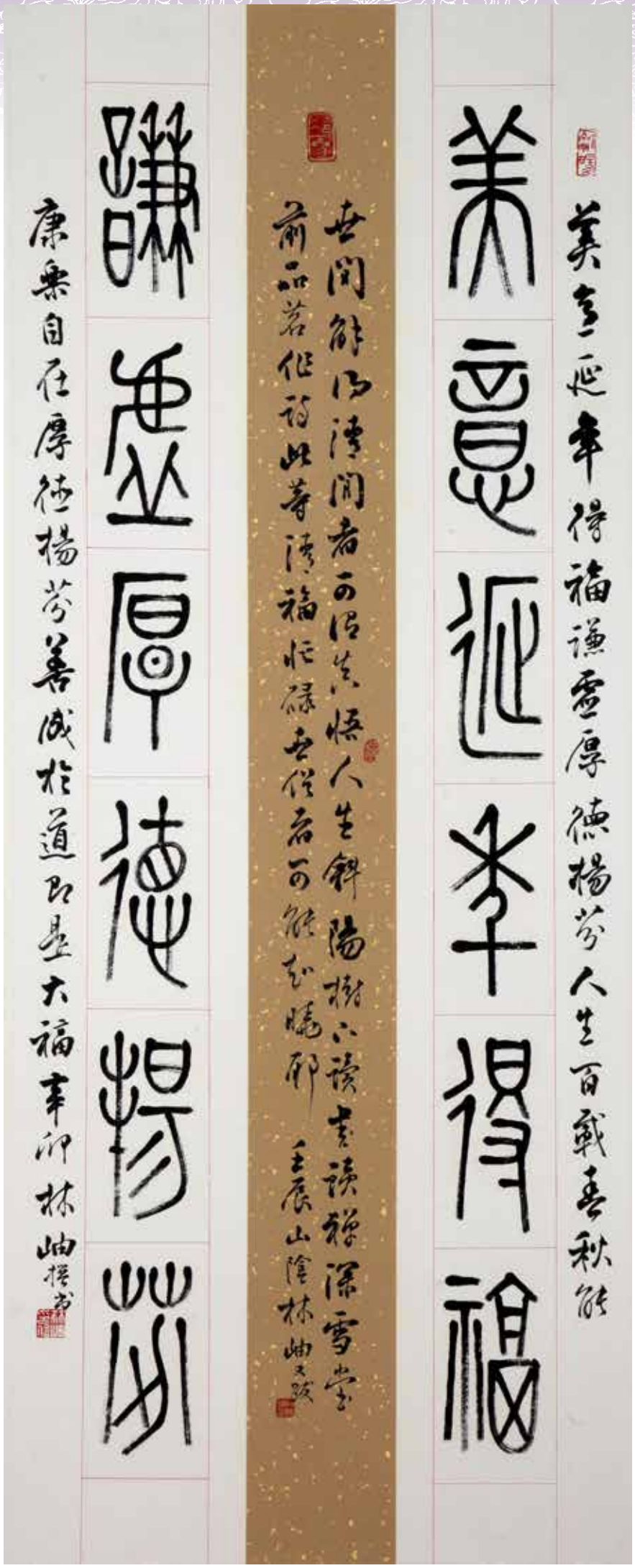
りん・しゅう

一九四五年、紹興に生まれる。現在、新華社中国新聞学院教授、北京市書法家協会主席、北京市文聯副主席、中国書法家協会顧問、中国国務院（内閣府）参事室傘下 中華詩詞研究院顧問、中央文史研究館書画院委員研究員、中国国家画院委員研究員、中国漢俳学会副会長、中国楹聯学会顧問。また、雑誌《中華詩詞》編集委員、雑誌《中華辞賦》顧問兼評議委員。主な著書に《古文体知識及詩詞創作》《林岫詩書墨萃》など

蘭亭で有名な書道の聖地・紹興で生まれた林岫氏は、著名な書家であり、そして現代中国で随一の女流詩人である。幼少期より私塾で古典文学を学び、詩才を発揮。現在、漢詩は四千首を超え、漢俳も千首に近づくほど。漢詩・漢俳の交流で訪日の機会も多いという知日派の林岫氏を、郭同慶氏が取材した。

（編集部）

中国当代13.indd 88 2020/02/10 19:39



《自作聯句》

美意延年得福　謙虛厚德揚芬

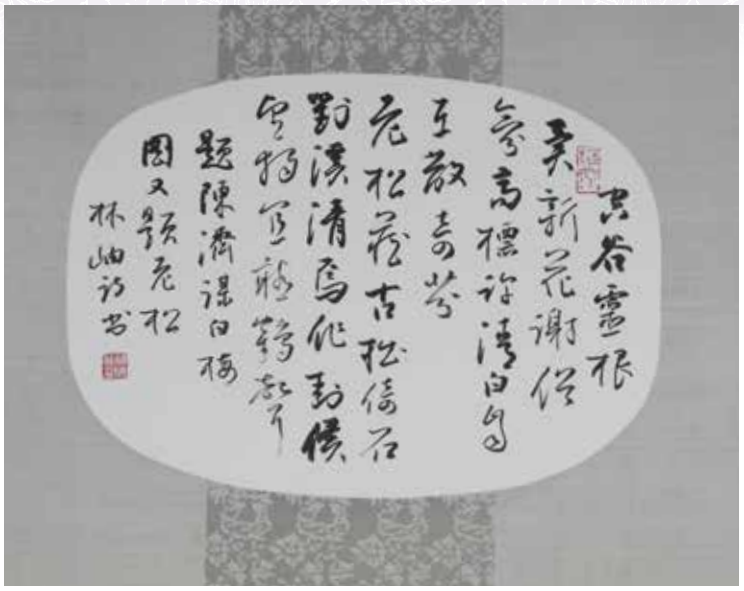
2011年

中国当代13.indd 89　2020/02/10 19:39

随一の女流詩人・書家 林岫

詩と書

四、五年前にその健筆が冴える《松鷹図》が四億元（約六〇億円）余りの高値で中国現代書画作品のオークション最高記録を刷新した斉白石（一八六四―一九五七）は、はたして詩人だろうか。斉白石本人は「私は漢詩が一番、印が二、絵画は三、書は四」と詩人を自称していた。しかし、文豪・郭沫若（一八九二―一九七八）が否定的な見方をしていたように斉白石の詩に対しては賛否両論がある。中国の書壇や画壇では、書家・画家の詩文の良し悪しが最も重視される。詩と書と画と印は、日本では順不同で横並びに考えられることがあるが、中国では「詩書画印」と古くから習慣的に詩を先頭に置く常識がある。日本でもよく話題に上る呉昌碩（一八四四―一九二七）が最後の文人と言われ、「詩書画印」の「四絶」と讃えられたことは良い例である。



《自作詩》

2017年

今回の主人公・林岫女史は、漢詩や漢俳の交流で訪日の数が多く、日本に知人・友人が多い。すでに漢詩は四千首の大台に到達し、漢俳も千首に近づく現代中国で随一の女流詩人であり、著名な書家である。

林岫女史は、現役の北京市書法家協会主席、北京市文聯副主席、中国書法家協会前副主席・現顧問、中国国務院（内閣府）参事室傘下 中華詩詞研究院顧問、中央文史研究館書画院委員研究員、中国国家画院委員研究員、中国漢俳学会副会長、中国楹聯学会顧問などを兼ねる。また、雑誌《中華詩詞》の編集委員、雑誌《中華辞賦》顧問兼評議委員を務める。

幸運な少女は詩人なり

一九四五年・終戦の年、蘭亭で有名な書道の聖地・紹興で林岫氏は生まれた。母親の実家は揚子江の出口北岸の港町である。祖父は染め商人で杭州、上海および南通で手広く商売をしていた。裕福な家系で、少女時代、幼い林岫嬢に不自由はまったくなかった。

一九四九年に蔣介石政府が破れ、同年の十月一日に毛沢東が天安門城楼にて「新中国の設立」を宣言した。政治体制の大変革に伴い、教育も新スタイルが導入された。

小学校では詩詞や古文書に触れる機会が失われ、祖父は、私塾を経営する親友の劉思祖先生に孫を託した。劉先生は古典文学や詩詞、および篆書・楷書に精通し、詩文を以て古典文学の基礎を子供たちにしっかり教え、想像力豊かな感性を育成する、いわば「詩文啓蒙」の達人だった。

中国で書道を「書法」と言うことは、誰もが知っているかもしれない。では「詩法」はどうか。あまり聞かないのではないだろうか。しかし、劉先生の私塾では「詩法」を教える。

「詩法」とは、要するには漢詩作りのツボを伝授することだ。まずは「平仄」の規則を教え、正しく出来た子供には一個の「爆蚕豆」（焼き空豆）を与える。間違った子供から一個を取り戻す。たとえば、劉先生は題に「霜」を出し、林岫嬢が「雪」と答えると先生は「良い」と評価しながら、「爆蚕豆」を一個くれる。このような教授法により数年もかからないうちに、漢詩作りの基本法則となる「平仄」や「粘対」などのポイントをしっかりと身につけた。聡明な林岫嬢は物覚えがとても速く、楽しく遊びながら漢詩を作る力をつけた。一九五六年、十一歳の時の一首の秀作を紹介しよう。

《蒲公英》

休嫌此花小　世上敢称公　未待秋風勁　先成白首翁

此の花の小を嫌うことなかれ。世上 公を敢えて称える。秋風の勁くなるを待たず。先に白首の翁と成る。

唐宋の詩人を連想させられるほどの素晴らしい漢詩である。

一九四九年以降、小中学校および高校の教育課程で漢詩作りを教える機会は全くなくなったが、それを私

中国当代13.indd 90　2020/02/10 19:39

塾で補った林岫嬢は、伝統的な詩詞にある韻律（押韻および平仄の規則）を身に付け、また人物などを直接には描写せずに暗示する「省法」や「合分法」などの手法を学んだ。「合分法」とは組み合わせる「合法」と分解する「分法」の二つの手法のことである。李白の《月下独酌》の「挙杯邀明月、対影成三人」の句は、詩人1＋明月1＝詩人・明月・人影の3になり「合法」のプラス方式を用い、蘇東坡の《水龍吟・次韻章質夫楊花詞》にある「春色三分、二分塵土、一分流水」の句はマイナス方式を使った「分法」であった。さらに、絶句を作る際に、描写する対象が詩句に現れたり、去ったり、また再度に詩句に出現する「出入法」についても厳しい訓練を重ねた。

このような伝統的な漢詩の伝授方法は、中国本土で稀（まれ）にしか見られない。しかし、東南アジアのマレーシアやシンガポールなどの華僑学校では継承されているようだ。

このような幸運な教育の機会に恵まれた林岫嬢は、祖父および劉思祖先生のおかけで十一歳頃から各種の雑誌新聞で漢詩を発表し、六十数年の間にすでに四千首余りの漢詩を発表し、現在は中国で随一の女流詩人と讃えられている。

林岫嬢は劉先生の私塾に通うことで、想像力とともに理解力、記憶力も相当に鍛えられたので、小中および高校まで文理ともかなり楽に勉強ができて、学級委員を務め、学内のさまざまなイベントも企画した。

ちなみに高校は大学合格率で江蘇省一の南通高校だった。卒業の直前、大学の選択では文理両方の担当の先生より強く勧誘され、悩んだ末に周恩来総理ならびに鄧穎超夫人に対する尊敬の意を以て、夫妻が卒業した天津の超名門・国立南開大学を志願し、問題なくトップで合格した。

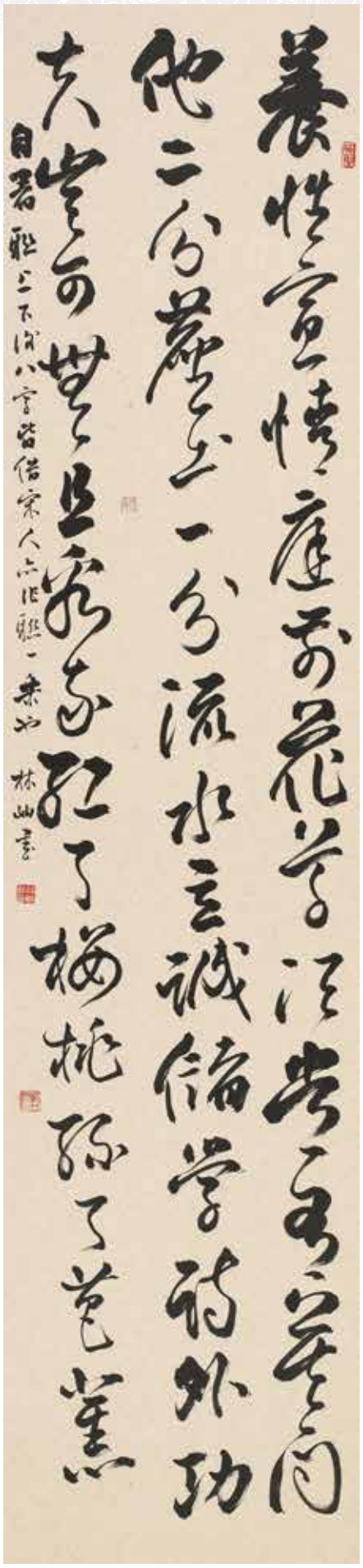
不撓不屈の青春

一九六二年夏、林岫嬢は人生で初めて北方に向かい、憧れの南開大学に入学した。中国文学部で古典文芸理論を専攻。当時の国立の「重点」大学は五年制だった。読書が好きな林岫嬢は大半の時間を図書館で過し、順調な大学生活を送りながら、詩文の創作や発表を続けた。成績は超優秀、次々と作品を量産できる詩人、美しい過ぎる美人と、林岫嬢は南開大学内で輝いていた。

しかし、運命は林岫嬢にいたずらをした。五年生の年に中国で未曽有の文化大革命の嵐が襲来したのである。孔子や孟子、すべての儒教思想や伝統文化などが一夜で否定された。大学も革命の戦場となった。学長や名教授は皆、闘争の対象に立たされた。数学が専門のある名教授は西ドイツへの留学経験が問題となり、スパイと罵られ、突然に見舞われたその災難に耐えられずに、夫婦で校舎のベランダから飛び降りた。林岫嬢は、その悲惨な場面を目撃し、両手を合わせ黙祷したという。

一方、大半の学生は革命先鋒の紅衛兵となり、ごく少数の学生は出身や自身の問題で対立軸に立たされ、林岫嬢はその一人だった。大学で最も古典文化が得意であるというだけで「罪」とされ、「白専分子」と決めつけられ、紅衛兵たちの革命の対象となった。「家宅捜索十八号」と紅衛兵の内部資料に記された林岫嬢は、ある晩に「悪夢」を体験した。紅衛兵が突然、宿舎に入り込んで来たのである。古籍や漢詩集、そして筆記ノートは皆、没収された。「旧（ふる）いものばかり見ている君の思想は封建

《自作詩》



養性宣情　庭前花草須常有　莫問他　二分塵土　一分流水　立誠儲学　詩外功夫豈可無　且看我　紅了櫻桃　緑了芭蕉

2007年

中国当代13.indd 91　2020/02/10 19:39

《自作聯句》

翰逸神飛　傳妙致無非造詣　冷齋疏竹　看虚懐有是清心

2008年

思想になりきっているから、思想を改造せよ」と命じられた。林岫は曲げずに対抗し、反省文も拒否した。紅衛兵はこの「白専分子」は簡単に思想の改造ができないから、労働改造させようと決定した。いわば残忍な肉体労働により「思想改造」を果たそうとすることだ。

林岫嬢は一九六八年八月に「労働改造」の「流刑」を受け、黒竜江省の「大興安嶺」呼倫貝爾市鄂倫春自治旗（村）にある林業局の霍都奇林場に強制的に「収容」された。啓蒙の師・劉思祖先生よりいただいた「月形硯」と銅製文鎮はお守りだった。

「大興安嶺」は中国の最北端に位置し、内蒙古高原と東北三省の「松遼平野」の分水嶺であり、中国東北部において北から南へ綿々と一二〇〇キロも繋がる雄大な山脈である。また中国で最も重要な林業基地となっている。しかし、冬期は表現できないほどの超寒冷地だ。そもそも「大興安嶺」の「興安」は、元々は満州語で「極寒処」を指したそうだ。真冬は平均で最低気温はマイナス四〇度、年に数日間はマイナス五〇度を超える日も珍しくない。南方の裕福な商家で生まれ育った林岫嬢は、強制労働の八年の間に生死に関わる危険に何度も遭遇した。想像を遙かに超える残酷な窮地に陥ったが、強制労働の仲間に助けられて、生き延びることができたのだ。

人生の苦難を体験し、不撓不屈の精神が鍛えられた。八年間の過酷な強制労働における唯一の精神的な支えは、漢詩作りとそれを筆で書き溜める喜びだ。大雪が降る寸前の究極の静けさは恐ろしく覚えているそうだ。降り出した雪は幼児の手掌ほど大きく舞って来る。杜甫や蘇東坡も未踏の絶景を若き詩人・林岫嬢が体験し、漢詩に書き溜めた。前人未踏の詩句が続出し、柳宗元が永州に謫居する際に歌った名句「千山鳥飛絶、萬径人踪滅」を遙かに超えたものもあった。人獣共存の環境においては、鹿、貂熊、黒熊など、百五十種類を数える野生動物がいつ出没してもおかしくない。共存共栄の世界なのだ。また、綺麗すぎるほどの「大興安嶺」の四季景色にも魅了された。受難中の詩人・林岫嬢は、まれに「旅」に出た。美しい丘陵、森林、河川、火山、湿地山稜の風景や大草原、澄んだ湖を目に焼き付けて村に帰った。夜、灯の前で林岫嬢は作詩した。「大興安嶺」をテーマにした漢詩は百四十首に上った。

詩壇で大活躍の才女

一九七六年の秋に文革が終焉した。四人組が逮捕された直後に、林岫氏は「労働改造」から解放された。文筆の才能が評価され、九月には首都で機械工業省が発行する雑誌社の編集の仕事を拝命した。直ぐさま副編集長に昇格。文革後は人材不足が社会問題になり、特に教育部門の教員、教授が足りない。林岫氏の才能は中央政府からも高く評価され、政府直轄の新華社中国新聞学院に抜擢、古典文学担当の副教授に任命され、その後、一九九五年に教授になった。

新華社のエリート記者を育成する新聞学院で古典文学や漢詩を教える林岫氏は、首都師範大学で同じ科目を教える啓功先生と同業の先輩と後輩として仲が良かった。啓功先生は皇室の末裔で幼い頃に厳しい「詩文啓蒙」を受けたそうだ。朝食前に漢詩を繰り返し朗読し、暗記が出来たら、教師の前に真っ直ぐに立って大きな声で朗誦する。合格と言われれば朝食を食べた。勉強の環境が違っても、幼い頃にしっかりと古文書や漢詩の力を身に付けたことは二人の共通点であったし、

中国当代13.indd 92　2020/02/10 19:39

書壇の中でも希少な存在である。

北京に戻った林岫氏は「大興安嶺」で書いた漢詩を続々と発表し、高く評価された。詩人や文人との交流も広がり、先輩詩人らとともに発案し、「中華詩詞学会」の創設に尽力した。林岫氏は最も若い発起人だった。

一九八七年の端午節に全国政治協商会の礼堂（大ホール）にて、中華詩詞学会の設立大会が開催された。全国各地から詩人が大集合した。正規代表は二百六十名、列席代表は六十名、また著名な詩人や詩壇の大御所六十名が特別招待された。林岫が最も若い発起人として参加した。設立大会議の当日は、党や政府の要人も来賓として出席するため、警備体制を厳しく整えた。中共中央政治局委員兼副首相の習仲勲氏（習近平主席の御尊父）などの来賓が挨拶した後、発起人や顧問が登壇する場面があった。林岫氏は年輩の姚雪垠先生（一九一〇―一九九九）について階段を上ろうとした際に警備員に止められ、「家族は休憩室へどうぞ」と言われた。そのとき姚雪垠先生が「彼女は家族ではなく発起人だ」とフォローしてくれたという逸話が詩壇に残っている。

一九九四年に雑誌《中華詩詞》が創刊、林岫氏は編集委員を兼ねた。また、雑誌《中華辞賦》の創刊（二〇〇八年）にあたっては、顧問兼評議委員に就任した。二〇一一年九月には、中央機構編制委員会が批准し、国務院参事室所および中央文史研究館が管理する「中華詩詞研究院」が設立された。六十四歳の林岫氏は最年少の顧問とした招聘された。他は皆、幼い頃に旧制の「詩文啓蒙」を受けた大御所の詩人ばかりだった。林岫氏は今でも詩壇の重鎮として活躍中である。

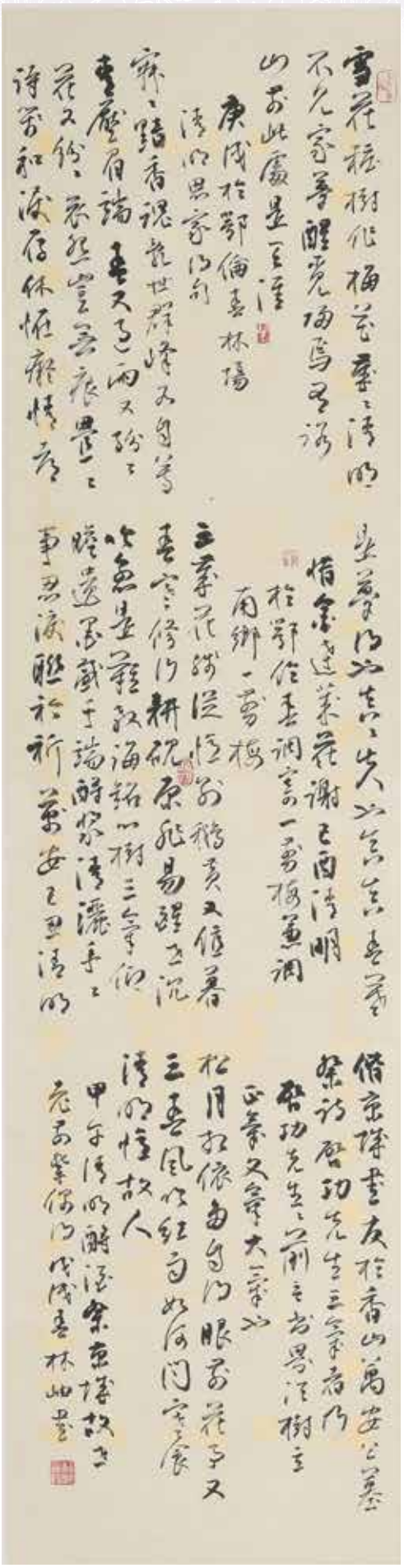
書壇でも大活躍

林岫氏は中国書法家協会の訪日団団員として、同協会婦女書法家訪日団や中国青少年書法代表団の団長として、十数回にわたり来日したことがあり、日本に友人・知人が多い。

林岫氏は第二回・第三回中国書法家協会全国大会で常務理事に選ばれ、第四回・第五回中国書法家協会全国大会では副主席として推戴（すいたい）され、第六回・第七回中国書法家協会全国大会で顧問に就任し、そして、第七・第八回中国文聯全国委員会委員も務めた中国書法家協会の大幹部である。

デビューは一九八五年四月に召集された第二回中国書法家協会全国代表大会だ。その大会では書協史上で唯一の「海選」方式（完全自由な選挙）を試行し、理事や常務理事を選出した。林岫氏はまだ四十歳になろうとする若さで高い得票数を得て常務理事に選出され、女流書家の代表になり、最高幹部会議に登場することになった。林岫氏は期待を裏切らず、直ぐさまに「全国婦女書法家展」を提案し、主席の啓功先生はこれを了承し、激励した。中書協事務局のスタッフと打ち合わせを重ね、各地分会の担当役員とも密に連絡を取り合った末、全国各省分会より二百人を超える女流書家の秀作が北京に集まった。翌年、史上初の女流書法展「初回中国婦女書法作品展」が中国美術館で盛大に開催された。開幕式典には全国婦女連合会・康克清会長（朱徳元帥の夫人）や国務院・陳慕華副総理ら、政府・文化界・婦女界の代表が参列した。女流書法家の秀作は美術館を彩り、書壇に一石を投じた。これは責任者の林岫常務理事が腕をふるった結果であり、大成功を収めた。

林岫氏を後押しした啓功主席は感無量だった。「協会役員の選挙後、林岫氏が常務理事に選ばれたことに疑



《自作詩》（清明詩四首）

2018年

中国当代13.indd 93　2020/02/10 19:39

《自作書画小品》

2009年

月八日（国際婦人デー）に青海省美術館にて、青海省文聯との共催により「第六回全国婦女書法展」を開催した。全国婦女書法展の先駆けである林岫氏の功績は、決して忘れられることがないだろう。

また、日中女流書家の交流にも大きな貢献をした。一九九一年、林岫氏が編集責任者となり青島出版社で《当代中日著名女流書家作品集》が編集出版された。表紙の題字は趙朴初氏が書き、啓功氏はお祝いの漢詩を撰した。「日中婦女書道の古今談」と題にした林岫氏の論文も掲載された。日本を代表する女流書家である大石隆子氏、田中竹園氏、大川寿美子氏など二十七名の作品も紹介し、趙朴初氏は「日中書道史上で梅と桜が競い合う真なる美談だ」と語った。全日本書道連盟理事長（当時）の田中凍雲氏が祝辞を寄せた。

林岫氏は中書協の副主席を退いたが、北京市書法家協会ではまだ現役の主席だ。同協会は中国書法家協会の北京分会として一九八三年九月に設立。啓功氏が初代の主席だった。その後、張旭氏、そして宣祥鑾氏にバトンタッチし、二〇〇三年に林岫氏が主席に選ばれた。今年は十七年目となり、文字通り類のない長期政権だ。昨年、第五回全体代表大会において林岫氏は再任したばかりであり、龍開勝氏、田伯平氏、李有来氏など中堅書家を副主席に据えた。首都である北京市書法家協会の動きは地方や中央に対する影響が大きい。林岫氏自身がそれをいちばん良く知っている。期待に応えるよう心休まず奮闘中である。

林岫氏は書家として、旧式私塾で学んだ古典書法の各書体をベースに楷書・行書を得意としてきたが、近年は古代遺跡・中山国の跡地で発掘された春秋戦国時代の青銅器に刻まれた象嵌文字――独特な線が細長い金文に夢中だ。その金文をアレンジした林岫氏の篆書は各種の全国展に出品され、高い評価を受けている。上品で字形や線が実に美しい。

献身的に働く知日派

この連載は初回の高式熊氏から前回の上海女流書家の周慧珺氏まで、これまで十二人の代表書法家を取材してきたが、林岫氏のように日本との関わりが密に多い知日派は初めてであった。

盛んな交流の中で生まれたエピソードをここで一つ挙げよう。二〇〇五年に日中漢詩人の集いが江蘇省張家港で開催された。張家港は鑑真大和上が六度目の東渡を成功させた黄泗浦がある。日中詩人の書道交流展に併せて、詩書の談論会も開催された。

著名な詩人書家・渡辺寒鷗氏（一九三一―二〇〇九）も社中の数名の幹部を率いて会合に参加。その間、渡辺寒鷗氏が林岫氏に日中で共同の漢詩集を作る計画がないかと尋ねた。そして「中国でもし計画がなければ、我々が仁を成すべき時は躊躇わない」と渡辺寒鷗氏は前向きな姿勢を表明した。中書協代表として臨席した林岫副主席は、苦い表情で胸中を打ち明けた。国際漢詩交流を促進しているため、各国の漢詩を編んで詩集にする林岫氏の提案に対しては中書協や中華詩詞学会も賛同しているが、なかなか予算が降りない状況を説明したのである。そして林岫氏は、少し待ってほしいと渡辺寒鷗氏に応対した。

しかし北京に戻った林岫氏が上層部に再度打診したものの、理想的な回答は得られなかった。林岫氏は「大興安嶺」で鍛えられた不撓不屈な精神をもって、自力で出版資金を用意することを決心した。林岫氏が長年にわたり自詠漢詩を書き溜めた巻子は、非常に魅力的でコレクターも多い。林岫氏はやむを得ずにそれを割愛し、自費出版の資金を確保したのである。

合同の編集委員を形成し、石川岳堂、服部承風、進

問を持つ人たちがいる。しかし、彼女の当選に私は大いに賛成だ。その理由を三つ挙げよう。一つ、書は風雅があり、伝統をしっかり継承している。二つ、溢れる文才は書協にとって宝となる。三つ、皆のために熱心に働くことだ。全国婦女書法展覧会の成功がその証だ」と啓功主席は書協の役員、また中国仏教協会会長で中書協の副主席を兼ねた趙朴初氏にも同様な評価を伝えた。趙朴初氏も頭を縦に振ったそうだ。

全国婦女書法展は今も継承され、中書協は昨年の三

中国当代13.indd 94 2020/02/10 19:39

藤虚籟の各氏が顧問に、渡辺寒鷗氏、綿引方風氏が副編集長、石川芳雲氏ら五人の日本人詩人書家も委員会に入った。二〇〇八年に《全球漢詩三百家》と題する糸綴じ画仙紙の上中下の三冊を収めた一函の漢詩集が刊行された。日中をベースに二十九カ国の漢詩人より三二五名を三年掛りで選抜し、一八一四首の漢詩を掲載した漢詩集である。百名の日本人の漢詩が収録された。林岫氏は出版後、真っ先に渡辺寒鷗氏に尊敬の意を込めて速達で送った。

著名な詩人・林岫氏は日本でもファンが多い。二〇〇二年十一月に日中国交正常化三十周年記念事業として成城大学に招聘されて、漢詩の現状について講演会を開いた。通訳を務めたのは中国で俳句研究の第一人者・鄭民欽氏だった。

一九八〇年五月に日本俳人協会訪中団が北京を訪問。中日友好協会に松尾芭蕉、与謝蕪村、正岡子規の俳句集多数を贈呈した。それを受けた趙朴初氏は感興を得て、「緑陰今雨来、山花枝接海華開、和風起漢俳」と即席で詠んだ。中国の漢俳はここから始まったのである。先駆者・趙氏を追随するものに林林氏、劉徳有氏、林岫氏などがいた。その後、五七五の文字数をなぞる中国版漢俳は人気を広げていった。

林岫氏は、一九九四年に《漢俳首選集》（趙朴初が題簽）、また同年に三百首の新作を収録した《林岫漢俳詩集》（趙朴初が題簽）を出版した。一九九七年には、日中国交正常化二十五周年記念、および日本現代俳句協会設立五十周年記念として、日本の俳句と中国の漢俳を一緒に掲載した《現代俳句・漢俳作品集》を日中共同で製作し、両国で同時に発売した。林岫氏は中国側の編集委員を務め、中心的な役割を果たした。

このような交流がさらに促進していくよう、二〇〇五年四月、中国対外友好協会は「中華漢俳学会」を発足させた。友協役員の林林氏は名誉会長を兼務、外務次官まで経験した知日派の劉徳有氏が会長、林岫氏、袁鷹氏などが副会長に就任した。設立大会には文化省大臣補佐官・丁偉氏や日本大使館公使・井出敬二氏、そして日本現代俳句協会名誉会長・金子兜太氏なども来賓として参列した。また当日は漢俳の歌会も催された。

漢俳は中国の上層部にまで広がった。二〇一〇年五月三十日に国賓として訪日した温家宝総理は、複数の日中友好団体や華僑華人団体が共同主催した歓迎式の席上で、即興による漢俳「春風化細雨、桜花吐艶迎朋友、冬去春来早」を披露。

林岫氏は三十数年間にわたる漢俳の発展史を纏（まと）めた《中国漢俳百家詩選》を二〇一三年に編集し、自費出版。付録として二十七人の日本人の俳句を掲載。日本現代俳句協会名誉会長・金子兜太氏から祝電が届いた林岫女史は、飛び上がるほど嬉しかったという。

林岫氏はまた教育者として、数え切れないほどの優秀な人材を世に送り出した。青少年の交流も非常に熱心に取り組んできたのである。

二〇一〇年八月、林岫氏は中書協会副主席・北京書法協会主席として成田山全国競書大会主催者より招聘を受け、団長として陳洪武氏、呉震啓氏らの中書協幹部らとともに大規模な青少年書法代表団を率いて、日本の青少年と親密な書道交流を実現させた。参加者は、互いに相手の長所を学ぼうという気持ちになった。

結びになるが、林岫氏が日本書壇との交流の中で最も誇らしく記憶しているのは、二〇〇二年に中国政府文化部（省）、日中友好会館、並びに朝日新聞社が共同開催した日中双方の「二十人展」だという。日本側は、新井光風、尾崎邑鵬、高木聖鶴、梅舒適、村上三島等の各氏、二十名の大家。中国側は、最年少で選抜された林岫女史を含む、啓功、饒宗頤、王学仲、沈鵬、劉江、周慧珺等の各氏、二十名だった。政府機関が中核となって開催されるこのようなハイレベルの交流展の再来を、切に希望している。

二〇〇五年に江蘇省張家港市鑑真東渡記念館の前で、日本人の詩人・書家の代表団に囲まれる林岫氏（中央）

林岫氏が編集長となり、中国・日本で合同の編集委員を形成し、二〇〇八年に出版された《全球漢詩三百家》（三冊を一函に収める）

郭同慶　かく・どうけい

書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に来日。王蘧常、銭君匋、方世聰、蕭海春に師事。二〇一四年度に上海（朶雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で作品集《墨海一粟》を出版。翰墨書道会長、東京藝術院名誉院長、東京海派書画院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、日本王蘧常先生顕彰会会長、豊道春海顕彰会顧問、日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海中国書法院名誉院士、上海呉昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事などを兼ねる

中国当代13.indd 95　2020/02/10 19:39